平成 24 年度第 13 回

県政知事懇談

湯﨑英彦の地域の宝
チャレンジ・トーク

と　き　平成 25 年 1 月 26 日（土）
ところ　あいプラザ 1 階多目的ホール

広　　島　　県

目　　次　　頁

開　　会 ……1

知事挨拶 ……1

事例発表者紹介 ……2

事例発表① ……3

事例発表② ……7

事例発表③ ……15

事例発表④ ……21

閉　　会 ……23

開　　会

（司会（八幡））

皆さん，こんにちは。

大変長らくお待たせをいたしました。ただ今から「湯﨑英彦の地域の宝チャレンジ・トーク」を開催いたします。

私は，広島県広報課の八幡と申します。

本日は，チャレンジに向けて，元気の出る楽しい会にしたいと思います。どうかよろしくお願いいたします。

知事挨拶

（司　会）

それでははじめに，湯﨑英彦広島県知事が御挨拶を申し上げます。

（知事（湯﨑））

皆様，こんにちは。今日は大変お寒い中，また土曜日でお休みの方も多いと思いますけれども，その中でお集まりいただきましてありがとうございます。

ここ廿日市で３回目の県政知事懇談会をやらせていただきます。今日は市長も来ていらっしゃいますが，今回は特に廿日市市に本当にお世話になり，この開催ができました。本当にありがとうございます

今日は，朝，佐伯に行って来まして，佐伯でされているかかしづくりを，まちにかかしを置いて，とてもかわいい，かかしというよりは人形なんですけれども，その様子を拝見させていただいて，その後は木材港の，これは知る人ぞ知る場所なのですけれども，ちょうどナフコの海側，ボートがあるところにスケートボードとかＢＭＸとかできるパークがありまして，そこに行ってまいりました。皆さん元気に活動されているところを拝見させていただきました。

午後は，これからチャレンジ・トークということで，今日は５名の皆さんにおいでいただき，廿日市で取り組んでいらっしゃるチャレンジについてお話をいただくことになっています。

これまで３回このシリーズをやっている中で，それぞれの地域の皆さんの活動は本当にすばらしいものがたくさんあると思っております。今日もそうなると思うのですけれども，ちょっとずつ自分たちが行っている活動の中ですばらしいことをする，ちょっと頑張る，それによって地域が大きく変わっていく。そんなことが今日も実感できたらいいなと思っ

ています。

これまでに各地域で行い，合計 387 人の県民の皆さんに発表をいただいています。そういう中からいろいろないいことが出てきています。今日もそういういい会になって，この５人の皆さんに元気をいただいて帰れたらと思っています。70 分ほどのちょっと長い時間になりますけれども，どうぞよろしくお願いします。ありがとうございます。

（司　会）

湯﨑知事，ありがとうございました。湯﨑知事，壇上の方のお席にお移りください。

事例発表者紹介

（司　会）

それでは，本日の事例発表者の皆様を御紹介いたします。発表者の皆様は檀上にお上がりください。それでは発表者の皆様を御紹介いたします。

はじめに，介護の仕事を通じて，地域との交流に取り組まれている地域密着型介護老人福祉施設「みやしろ」介護支援専門員の金子貴文さんです。

続いて，御夫婦で吉和に移住されて開いた家庭料理のお店を通じて地域づくりに取り組まれている家庭料理「つばき」店主の和田恭明さんです。

続いて，木彫り彫刻「宮島彫り」の伝統を引き継ぎ，後進の育成にも取り組まれている宮島の舗「ひろ川」の伝統工芸士 広川和男さんです。

昨年，全国高等学校選抜ボート大会，全国高等学校総合体育大会，そして岐阜清流国体でのボート競技「ダブルスカル」種目で優勝し，三冠を達成された，宮島工業高校３年の野本耕司さんと矢野哲圭さんです。

どうもありがとうございました。事例発表者の皆様はお席にお戻りください。

それでは，ここからは湯﨑知事にコーディネーターをお願いしたいと思います。それでは，湯﨑知事，どうぞよろしくお願いをいたします。

事例発表

（知　事）

ありがとうございます。

それでは早速始めたいと思います。本日発表していただきます４組の皆さんは，それぞれの地域や職場，また学校で積極的に活動して挑戦をいただいている方々です。

事例発表①

（知　事）

はじめに御紹介させていただきますのは，今もありました地域密着型介護老人福祉施設「みやしろ」の介護支援専門員 金子貴文さんにお願いしたいと思います。

改めて金子さんの御紹介ですが，金子さんは実は長崎県の御出身で，長崎から宮島に移住をされて，新たに介護支援専門員の職に就かれたということです。この介護の仕事を天職というふうにお感じになっておられまして，地域から孤立してしまいがちな高齢者，施設の入所者の方々と地域の交流に取り組んでいらっしゃいます。

今後は，施設を通して地域との交流を深めるため，施設での地域の祭りを開催したいと考えていらっしゃるそうです。

今日の発表のテーマは，「施設を通しての地域密着・地域交流」です。それでは，金子さん，よろしくお願いします。

（事例発表者（金子））

皆さん，よろしくお願いします。

はじめに，先ほども紹介にありましたけれども，宮島町にあります地域密着型介護老人福祉施設「みやしろ」で介護支援専門員をさせてもらっています。

本日は，私の仕事内容の紹介，地域との交流，施設としての地域での役割についてお話ししたいと思います。

私の仕事内容の紹介をします。施設での業務としまして，私の場合は介護支援専門員と介護職員の両方を兼務しております。介護支援専門員としての仕事内容としまして，施設サービス計画の作成，介護保険の請求業務，市役所関係書類の提出，入居者様御家族や関係者への電話連絡などをしています。介護職員としては，入居者様の日常生活全般での介助をしております。日常生活全般での介助ということで，食事の介助であったり，排泄の介助であったり，着替えや歯磨き等の介助を行っております。

仕事風景の写真も入っているのですけれども,介護支援専門員の業務は３つのユニット，ユニットというのは９人から 10 人の入居者様の共同生活されているところを言うのですが，僕らは家族と呼んでおります。そこを回り，入居者様とお話をしたり，職員と情報交換をして，入居者様の個別ケア（介護）をするためのニーズ（必要性）を引き出すようにしています。写真は分かりにくいかもしれませんけれども，なるべく御入居者様と同じ目線でお話しするようにしています。

次は，介護職員としての仕事風景です。ほとんどの介護職員の方は１つのユニットに固定なのですけれども，僕の場合は，介護支援専門員としての業務内容で入居者様皆さんの

把握をするために３つのユニット全部に入り，日常生活の介助及び支援をしています。施設では，寝たきりの方でも起きてもらい，食卓を一緒に囲む。家族と言っていますので，そのように努力しています。

介護職員としての仕事風景です。今，ノロウイルスなど感染症などがはやっておりますので，手すりやトイレは必ずハイター消毒をしています。

食事風景で，みそ汁をよそっている写真ですけれども，こういうふうに下から調理したものが上がってきて，ユニットの方で温めて食事を提供しております。

次に，地域との交流についてです。宮島地域の現状として，平成 24 年 12 月 1 日現在，人口 1,796 人，65 歳以上の高齢者は 740 人，介護保険認定者は平成 23 年度で 119 人，宮島町の高齢化率は 41.2%です。

平成 24 年 12 月 1 日現在で，先ほどのものを文章にしましたが，宮島地域は 65 歳以上の高齢者が 740 人，介護保険認定者が 119 人であり，介護保険認定者数が高齢者数の約 16%の割合を占めています。その方たちは，宮島地域にあるデイサービスやホームヘルパーを利用されていますが，ショートステイサービスを利用されている高齢者は，「みやしろ」ができるまでは島外の施設を利用せざるを得なく，とても不便を感じておられました。しかし，平成 24 年４月に廿日市さんの協力で「みやしろ」ができてからは，４室なのですけれども，ショートステイができて，島外に渡らなくてもよくなったので，皆さんとても喜ばれております。

次は地域との交流なのですけれども，私は長崎から宮島に移り住んで４年になります。宮島で様々な高齢者の方とも触れ合い，また，お話しする機会が増えてまいりました。施設を通しての地域交流の一環として，昨年 10 月 27 日に施設の方でお祭りをさせてもらいました。地域のボランティアの方などにお声をかけてお手伝いをお願いしました。１週間前ぐらいにボランティアの方に御連絡したので，急なお申し出にもかかわらずお引き受けいただいて，とてもうれしく，感謝の気持ちでいっぱいです。

これがお祭りの準備段階の写真です。フランクフルトとか，おでんとか，いろいろな出店をつくらせていただきました。これが施設の中庭で，中庭正面からの写真です。

祭りが始まってからの風景です。おむすびとか，からあげを準備したり，ほかにもさせてもらいました。

次に，みやしろ祭りに御協力してくださったボランティアの皆様として，たこやきをボランティアの方に焼いていただきました。日本舞踊の踊りをしてくださったボランティアの方もおられましたし，フラダンスをしてくださったボランティアの方，あと篠笛とか，獅子舞とかで錬り歩くのに笛を吹かれている方がおられるのですけれども，そういう方をお呼びして吹いていただきました。

次に，施設としての地域での役割です。先に挙げたお祭りでもそうですが，私としましても，地域に開かれた施設を目標にして頑張っているところです。施設名に地域密着型と

あるとおりに，高齢者が要介護状態になっても，慣れ親しんだ地域や人と触れ合い，一緒に生活を継続できる，そういう施設にしていきたいと思います。

最後に，今後のチャレンジとしまして，今まで話してきましたように，私の活動は施設の中での活動ですが，平成25年度は施設の外に活動の場を広げて，宮島幼稚園，宮島小中学校，廿日市市社会福祉協議会，宮島支所，宮島地域住民の方と一緒に地域に開かれた施設を目標に活動していこうと思います。

あと，プラチナ世代のボランティアの皆様にもその仲間に加わっていただき，地域全体が福祉「幸せ」になるように頑張っていきたいと思います。

以上で終わります。ありがとうございました。

（知　事）

金子さん，どうもありがとうございました。宮島ではじめてショートステイができる施設ということで開始され，金子さん自身は長崎からやっていらっしゃったということで，長崎にいたときには介護のお仕事をされていらっしゃったのですか。

（金　子）

長崎にいるころは整骨院で，柔道整復師と鍼灸師の免許を持っています。

（知　事）

そうなんですか。では，こちらに来られてからですね。

（金　子）

こちらに来てから，介護の方の介護支援専門員の試験を，ちょうど介護に入って1年目ぐらいで取らせていただきました。長崎にいるころは，患者さんでも1日30人とか40人とか診ていましたが，今度は本人さんと1対1になる。あと，御家族さんとも話せるというのが，自分でも介護支援専門員になって天職なのかなと思っています。

（知　事）

そういうふうに個人個人とコミュニケーションを図っていくことができるのがいいなというふうにお感じになられたということですね。

（金　子）

はい。あと，本当に地域の方とも触れ合えるような施設にしていきたいと思います。

（知　事）

今おっしゃった地域の人たちと触れ合うという地域密着型の施設ですけれども，今，広島県では社会で育てる子どもたちということで，子育てを，お母さんだけではなくて，お父さんも参画して，さらにその家族だけではなくて，地域全体で子育てを応援しようという考え方があります。介護の場合も，その家族だけに任せてしまうのではなくて，地域全体でみんなが支え合っていくという共同社会を目指しているところもあって，それを実践されているのですけれども，なかなかそれを実際に実践しようと思うと難しいところがあると思います。子育てでもそうなのですけれども，介護でも，地域でといっても，ほかの人を，ある意味でいうと他人を面倒みていくというのは，コンセプトで打ち出すのは簡単でも，本当にそれをやるのはなかなか大変です。金子さんのような方が結節点というか，接着剤になっていただくと，地域の人たちも入りやすいし，周りの介護を受けられる方も安心してお任せできると思いますけれども，そこはどういうふうにお感じになっていらっしゃいますか。

（金　子）

僕が宮島に来て４年なのですけれども，やっぱり孤立化が進んでいると思います。高齢者でもそう，お子さん，子どもさんでもそうですけれども，そういうので全体でやれるお祭りを僕も計画したいと思っています。子どもから大人，高齢者まで，全部で楽しめるものをしていこうと思って，今，計画しているところです。

（知　事）

これまでに実際に行われたみやしろ祭りも，参加者は施設を御利用される方と，ボランティアの方と，周りの方，地域の方も参加されたということですよね。ただ，地域で支援してよと言っても，なかなかやりにくい。どういうふうにすればいいのか分からないと思うのですけれども，こうやってお祭りとかを企画されると，そこに参加しやすいということもあるし，さらに幼稚園とか小中学校とか，みんなに広がっていくと，宮島というのはそんなに大きな地域ではないですから，広がりやすいということですかね。

（金　子）

やっぱりお子さんとの触れ合いがすごく大切だと思うのです。高齢者の方も，施設も孤立するイメージがあるので，子どもさんにもどんどん入っていただきたいと思って，計画を，今から幼稚園さんとか小中学校さんにも電話をかけて，そういう日程を練ろうと考えています。

（知　事）

なるほど。市や県というのも，計画とか何とかで地域のみんなで支え合うというコンセ

プトは簡単に出してしまうのですけれども，実際にはこうやって金子さんのような方がいて，小学校に電話して，今度来ていただけませんかとか，お祭りを企画して，たこ焼きを焼こうとか，フラダンスを踊ってもらおうとか，そういうことがないと，実際にそれは動いていかないことだと思います。お仕事の中で介護をされるだけでも大変だと思いますが，そこに止まらず，こうやってそれを広げていこうというのは，さらに大きなエネルギーが要ると思いますけれども，そんな大変なお仕事を自ら引き受けてやっていらっしゃる金子さんには本当に頭が下がります。ありがとうございます。金子さんに皆さんもう一度大きな拍手をお願いしたいと思います。ありがとうございました。

（金　子）

ありがとうございました。

事例発表②

（知　事）

続いて次の発表にまいりたいと思います。次は，家庭料理「つばき」店主の和田恭明さんにお願いしたいと思います。

和田さんは，広島市内から吉和に移住されたということですが，御夫婦で家庭料理のお店「つばき」を開業して，地元のお野菜を使ったやさしい味の和食を御提供されています。

また，吉和産の「ルバーブ」を，ルバーブって御存じですか。最近ジャムとかでときどき見ますけれども，野菜ですよね。すっぱいお野菜ですけれども，これを専門店でジャムやケーキに加工や販売してもらうことで，ルバーブの特産品化による地域づくりにも取り組んでいらっしゃいます。

ちなみに，先ほど「つばき」のお弁当をいただきました。この前に会があってお弁当をいただいたのですけれども，本当にやさしい味の，家庭の味というのは本当にそうだなと，我々は既に楽しませていただきました。

それでは，和田さんの今日の発表のテーマは，「地域を元気にするお店をめざして」です。それでは，和田さん，よろしくお願いいたします。

（事例発表者（和田））

今朝，廿日市の奥の吉和というところから出てまいりました和田と申します。よろしくお願いします。

廿日市市は合併して大きくなりましたが，吉和は，今朝は大雪で，２日前からものすごい突風が吹いていて，今朝からずっと雪が降って，車にも道路にもたくさん積もっていました。羅漢に道の駅がありますが，あの辺までツルツルで，ゆっくりゆっくり出てきまし

た。そういう山奥から宮島の世界遺産のあるところまで，広い地域をこの廿日市は持っています。その中の吉和に移住しました。

「地域を元気にするお店づくり」というかっこいい名前を付けたのですが，これに沿って話をさせていただきたいと思います。

私は大分老いぼれてきましたけれども，年をとっても夢を持ち続けてもらいたいと思って檀上に上がった次第でございます。よろしくお願いします。

まず，私は昨年７月に，吉和にお店をオープンしました。特に野菜を中心にした日替わり定食ですけれども，お店をさせてもらっています。家内がこけだま，山野草が好きで，その関係の展示と，私はステンドグラスを 13 年ぐらいやっているのですが，その辺のこともやっております。

時間的に制約を受けていますので少しスピードアップしますが，これは私のプロフィールということで紹介させてもらいます。現在 68 歳です。もうすぐ 70 歳になります。マツダに入って，56 歳のときに退職しました。退職後，ステンドグラスとかをして，平成 19 年，今から５年前に佐伯区の五月が丘というところで，この家庭料理「つばき」という同じ名前なのですが，母が住んでいた別室を使って予約制のランチをやっておりました。次に，23 年９月ですから１年ちょっと前ですけれども，吉和に完全に移住して，後戻りしないように佐伯区の方は土地も家も売り飛ばしました。昨年３月から新築し，７月に開業しました。

妻の方は，学校食堂でいろいろな調理を学生に出して，その間に調理師の資格を取って，辞めた後，自分でやりたいと言うものですから，やりました。それ以後は私と同じで今日に至っております。

どうして広島から吉和のような辺鄙なところに行ったんねとよく言われます。年をとると，まちなかの便利のいいところで，マンションをどこか借りて，鍵一個かければどこにでも出られるような生活をするんですよと，婿さんから言われましたが，いやいや，そうじゃない。わしは年をとってからが青春なんだよと言いましたが，実は 63 歳のときに肺がんが見つかって，これはたまたま見つかってラッキーだったのですが，２年ぐらいして体力が回復すると，このまま人生を終わらせたくないと思って，いろいろ考えて，これから 20 年は元気でおりたいと言ったらぜいたくなんですけれども，85 歳まで元気でいたい。元気でおって，ころっといきたいというのは誰もの夢ですが，そのためには，いつまでも五月が丘の広島市の方におったのではあきがくるということで，あきがくるというのはおかしいですが，新しいこともないので，どうやって過ごそうかということを考えて，私は夏に弱いものですから，吉和は夏，とても涼しいです。西の軽井沢と言われています。ゆっくりと散歩してもいいし，時を刻むことができる。そういうことで，ここで生涯現役の自分の人生を送ろうと思って決意しました。

吉和は，12 年前に，マツダの会社を辞める直前に，自分でログハウスを建てたという経

緯もあり，なじみが深かったので，そういうことでここに決めて移住しました。

どうして食事処を吉和に来てまでするのかと，そういう話ですが，いろいろな人が来てくださいます。お店をしていないと来てくださらない方もいます。例えば自分がお店をしていなくて，友達においでよと言っても，なかなか行きにくいのです。だけど，お店をしていると，誰でも来てもらえます。中学校の同級生も来てくれます。それでまた話が弾みます。それともう一つ，次に書いておりますが，家内の特技があって，調理ですけれども，以前から感じておりましたが，家内の味付けを私は気に入っていて，やさしい味なんです。今日，知事にもお弁当を買っていただきまして，食べていただきましたが，もう一つは，思いとしては，吉和のとれたての野菜をふんだんに使って調理していく。これは五月でもやっていましたが，冷凍食品は最小限にして，冷凍食品をチンして出す店も最近は多いですが，冷凍食品は使わないで食事を提供していきたい。長居してもらってもいいように，ゆっくりしてもらう場を皆さんに提供しながら，いろいろお話ししたり，人の輪を広げたいという思いがありました。

私のチャレンジをここに三つ挙げています。これは，最初から考えていたことではなくて，吉和へ来る前は，とにかく先ほど言いましたような気持ちでのんびりしたいな。で，人生ずっと頑張りたいなという簡単な思いで来たのですが，やっぱり吉和で，頭の中を整理していきますと，一つは，家庭料理「つばき」を再開して，とれたての野菜を使ってやさしい味のランチを皆さんに提供していく。そういうことで店を運営していきたい。それが自分を元気にする源ではないかと。

二番目は，これまた家内が非常に熱をあげているのですけれども，「ルバーブ」というのを御存じの方はいらっしゃいますか。あと写真で紹介しますが，これはヨーロッパで非常にポピュラーな野菜です。ルバーブのジャムとかサラダとかジュースとか，いろいろなものができるのですが，この辺では吉和しかできないのです。例えば津田まで行きますと，夏の暑さに弱いので，北海道とか長野の信州，そういうところでないとなかなか元気に育たないルバーブなので，それを何とかして特産品にできないかと。

三つ目は，「地域の人と親密なコミュニケーションをとり」とかっこいいことを書いていますけれども，要は，地域のものを使って，地域の方が来てくださるようなお店にしたい。吉和というのは，御存じだと思いますが，観光地化してきています。よそから来てくださる方，スキーの方，ウッドワンの美術館もあるので，そういう方もいますが，それはそれで置いておいて，吉和の方たちに愛されるお店にするということで，生活も同じ店ですので，吉和の中の地域のいろいろな活動にも参画し，日常生活もそこでやっております。そういう気持ちで今までやったことは，下に書いておりますが，棟上げの餅まきとか，お散歩ギャラリーの提案など，いろいろやっております。

これは，750 円で出しておりますが，日替わり定食です。野菜をたくさん出しております。

これはコーヒーセットですが，左側のクッキーの上に乗せている赤いのがルバーブのジャムです。非常に酸味があって，あっさりした味のジャムです。コーヒーは，佐伯区でやっておりましたコーヒーをそのまま持ってきております。

これはルバーブの紹介ですが，原産はシベリア南部です。ヨーロッパでは，紀元前からこのルバーブは栽培されていて，左側にあるのが吉和の栽培農家さんの１人ですが，ああいう大きなフキのような葉っぱですが，それの茎を使います。フキのような葉っぱはシュウ酸が多くて食べられなくて，むしろ毒です。その間の茎を使って，茎をぶつ切りにして，ジャムにしたりします。これは非常に簡単です。マーマレードなどは非常に大変ですけれども，そういうのではなく，簡単にできます。書いておりますけれども，廿日市の速谷神社にありますコンディトライ・フェルダーシェフでジャムをつくってもらい，私のところでも 650 円で販売しております。

吉和のこの方がつくったルバーブを加工してもらって，販売しています。

地域を元気に！と言っても，えらそうなことですけれども，昨年，上棟式のときに餅まきをしました。

クリスマス会を 12 月 23 日に，地域の人にクリスマス会をどうですかと言ったら，子ども会で是非やらせてよと言われて，その地域の子どもさんと御父兄の方で 25 人ぐらい，入りきらないぐらいまでいっぱい入りまして，にぎやかに楽しみました。

それから，お散歩ギャラリーというのを皆さん御存じですか。吉和お散歩ギャラリーです。これは，広島市の佐伯区で「五月が丘まるごと展示会」というのをやっていまして，私が事務局をやっていたものですから，こんなのをしたらどうかと話をして，廿日市の市の支援員の方が中心になって運営されて「お散歩ギャラリー」，これは非常に盛況で，二日間で 2000 人来られて，吉和の中も久しぶりに賑わったと。

本年度と書いていますけれども，昨年やっていたことで，１人暮らしのお年寄りの方がたまにうちに食べに来られて，何とかして夕食を食べたいと言われて，そういう方には特別に出前ということでお弁当を二，三の方に届けておりました。今年はそういうことをもう少し広められないかと思い，今，廿日市市にも相談させてもらって，少しでも助成金が出ればお年寄りの負担も減ると思って，何とかしたいと思っています。夕食を届けることで，１人暮らしのお年寄りとの接点ができます。今，吉和には 80 人ぐらいいらっしゃいます。そういう方の支援といいますか，御存じだと思うのですけれども，吉和は雪も深く，冬は寒いです。そんな中，お年寄りは１人でよう生活していると私も思うのですが，皆さん頑張っておられます。先日も，90 歳になる方が，ついに養護老人ホームに入られましたけれども，ずっとそういう形でうちも夕食のサポートをさせてもらいました。

これは，餅まきの写真風景です。こんなにいたかなというぐらい集まってくださいました。

これはお散歩ギャラリーのときの写真です。二日間で 2000 人集まって，非常に賑わいま

した。

これは私の手作りですが，ログハウスをオープンにして，家内の山野草の展示と私のステンドグラスの展示，それから，ログハウスのオープン。

これはクリスマス会のときの光景です。

そういうことで，私はまだ68歳ですから，これからあとまだ90歳までは元気でやりたいと思っています。皆さんまだお若い方もこの会場にはいらっしゃると思うのですけれども，人生はいつどうなるか分かりませんから，自分でどんどんチャンスをとらえていく。そういうことをされたらと，老婆心ながら思いますので，こんなことでこのチャレンジ・トークに値するのかどうか知りませんが，大変申し訳ないですけれども，これで終わらせてもらいます。どうもありがとうございました。

（知　事）

和田さん，どうもありがとうございました。今，お話の中にもありましたが，もともとマツダで勤務をされていらっしゃったということですけれども，マツダと今の「つばき」は何か関係があるのですか。

（和　田）

関係は全くないです。あるとすれば，人脈を生かして，こういうことをやっていると言って，来てもらうぐらいです。

（知　事）

マツダでお仕事は何をされていたのですか。

（和　田）

マツダでは，開発関係の仕事と，辞める前は５～６年購買部門におりましたけれども，あまり関係ないですね。

（知　事）

その辺のスキルとか，仕事の力とか，そういうのは。

（和　田）

パソコンがちょっと使えるぐらいのものです。

（知　事）

なるほど。奥様が調理をされるということで，そのときのお仕事が今でも役に立ってい

るということですかね。

（和　田）
　そうです。

（知　事）
　吉和には，もともと御縁はなかったのですが，御自分でログハウスを建てられて，気に入って移住されたということですけれども，肺がんを患われて，肺を摘出されたということは，今も右肺しかないということですか。

（和　田）
　今はこちら側だけです。

（知　事）
　右肺だけということですね。なかなか今の条件だけを聞くと，仕事は退職をして，病気になってということだけで考えると，なんとなく疲れたなというふうになっちゃいそうですけれども，でも，頑張られた。

（和　田）
　そうですね。そういう気持ちになりますね。最初の元気になるまでは，いつまで元気でおられるかということばかり考えていました。それではいかんと。

（知　事）
　物理的になかなか回復しないと難しい面も当然あると思いますけれども，運よくそうやって回復されて，そのときに気持ちの持ち方で随分変わってきたのではないかと思うのですけれども，そう思われませんか。

（和　田）
　そう思いますね。私はもともとのんきな者ですから，あまり深刻に考えないのですけれども。

（知　事
　そういうふうに，それから一念発起をされて，年をとっても青春だという気持ちで，お店を開店して，というか，家まで新築して，そのときはお幾つだったんでしたか。

（和　田）
昨年，家を建てましたので，67 歳のときです。

（知　事）
そうですね。67 歳のときに新しく家を建てて，それから 30 年ローンなんて組めないですよね。それから，店まで開けて，店を開けるだけではなくて，餅まきをされたり，あるいは子どもたちにクリスマス会を，これはお店でされたのですか。

（和　田）
お店を使ってもらいました。

（知　事）
子どもたちを呼んでクリスマス会をやって，さらにお散歩ギャラリーで 2000 人も来て，すごいですね。

（和　田）
廿日市で 28 ヵ所，廿日市の住民の方が協力してオープンしました。自宅をオープンにして，皆さんに来てもらいましょうという形です。

（知　事）
そこに参画をされたということですね。

（和　田）
ええ。それに参画したり，私もアドバイスしたり。これは，五月が丘まるごと展示会の走りです。それを紹介して。

（知　事）
そうなんですか。では，それは和田さんが御提案をしてされたのですね。なるほどね。
次は１人暮らしのお年寄りの食事の面倒までみる。すごいですね。

（和　田）
いつ自分が１人暮らしになるか分からないですからね。

（知　事）
でも，何というか，気持ちの持ちようというか，人の役に立ちたいというお気持ちもあ

ると思うのですけれども，情けは人のためならずではないですけれども，面倒を見るのは人のためならず，御自分もそれで元気で，一生懸命頑張って85歳まで元気でやるということで，本当にやりがいを自分で見つけられて，自分で取り組んでおられる。これから高齢化社会と言われて，なんとなく暗いイメージがありますけれども，本当はそんなことはないと。高齢化，高齢化と言って暗いイメージを押しつけるのは僕はよくないと思うのです。だって，こんな元気な高齢者も，高齢者と言ったら怒られますけれども，退職されて，引退されて，というか，まだ引退していないわけです。68歳にして現役ですから。

（和　田）

高齢化したつもりはないです。

（知　事）

そうでしょう。だから，高齢化と言うのはよくない。僕は人口減少は問題だと思うんです。これは大きな課題だと思いますけれども，高齢化というのはちっとも問題ではない。元気じゃないのが問題なんです。高齢化はいいじゃないか。元気にやろう。しかも，その中で自分ができること，あるいは奥様とできることを，それなりの決断とか決意はあったんでしょうけれども，片意地を張って社会のためになるんだというのではなくても，本当に地域の周りの皆さんのために役立っておられる。気持ちの持ちようでこんなに違うのかという感じがいたします。

（和　田）

吉和に来て，ますますそれを思ったのは，吉和の方は皆さん元気です。80代の男性の方も薪割りを一生懸命やって元気です。女性も元気です。だから，先ほどの金子さんのお話にもありましたけれども，65歳以上が高齢化の中に入りますが，65歳はまだ若いです。70歳でもまだ若いです。75歳か80歳ぐらいからではないですか。

（知　事）

やっと認められる。

（和　田）

そうです。そういうふうに思ったらいいんじゃないですか。

（知　事）

そうですね。本当にそれを実践されている和田さん，すばらしい活動だと思います。もう一度和田さんに大きな拍手をお願いしたいと思います。ありがとうございました。

事例発表③

（知　事）

それでは，次にまいりたいと思います。次は，宮島の舗「ひろ川」の伝統工芸士 広川和男さんにお願いしたいと思います。

改めて広川さんの御紹介です。広川さんは，故大谷一翠氏に師事され，彫刻の道に進み，そして，伝統工芸士として江戸時代から続く木彫り彫刻の宮島彫りの伝統を引き継いでいらっしゃいます。

現在は,宮島伝統産業会館で教室も開いておられ,後進の育成にも力を入れていらっしゃいます。

今日の発表のテーマは,「伝統工芸『宮島彫り』の継承」です。それでは，広川さん，よろしくお願いいたします。

（事例発表者（広川））

皆さん，こんにちは。広川です。

今ごろ宮島の会議に出ても，私が一番年寄りです。今日も，和田さんより私の方が一つ年上です。昭和 18 年，戦前生まれです。ですから，今年，古稀になります。この年まで生きていますと，いろいろなチャレンジをしてきましたので，今日のお話をいただいたときにはどうかと思いましたが，今，伝統工芸の継承のために一所懸命努力はしておりますので，伝統工芸の宣伝のためにもと思って来ましたが，まさか市長がおいでになっているとは思いませんでした。それから，お世話になっている課の参事，観光課の課長さん，それから宮島のことはとてもよく知っている西広島タイムスの大崎くんの顔も見えますので，ちょっと帰ろうかというような気持ちもしております。

といいますのは，私，今日の話をするのに，何の組み立てもしてきておりません。ただ，お話としては 10 分ぐらいでということで,何とか口から出任せを言ってこの場を乗り切ろうと思っておりますので，是非御協力をよろしくお願いします。

湯﨑知事も人生の大変なチャレンジをなさって今日があるわけですけれども，改めてここへ来てみますと，私は大変な島に生まれ育って今も生きていると。実は，島にいても，さっき金子くんと話したのですが，彼と今日はじめて会いました。高齢化率が 41%，大変な限界集落だなというのは日々感じておりましたが，その高齢化率を引き上げている 1 人でもあります。

宮島のすごいところは，人口は 2000 人弱だと思います。高齢化率は 41%。そんな島に昨年は 400 万人以上のお客様が世界から来てくださいました。本当にすごいところだと思います。私は宮島生まれの宮島育ちですが，どこの田舎でもそうですが，その地域に生ま

れ落ちたときに，残れるか，残れないか，大体決まるのです。宮島ですと，旅館の息子であるとか，饅頭屋さんの息子であるとか，商店街にそこそこの店があれば残れるのですが，私は今でこそ町屋通りという通りになっていますが，あの裏通りの子だくさんの貧乏人の生まれで，今はばかになっておりますが，中学校時代までは成績が結構よかったんです。高校は廿日市高校に行かせていただきました。それも育英会の奨学金をもらって行かせていただいたのですが，今日は宮工の生徒たちも来ていますが，現在は宮工に移っている木材とか建築はそのころ廿高にありました。家庭の事情から言えば，当然建築か木材工芸へ行って，卒業と同時に社会に出て行くというのが私のような立場の人間のパターンなのですが，さっき申し上げたように，ちょっと成績がよかったものですから，つい普通科へ入りまして，そこでチャレンジをしなければいけなかったのですが，というのは，当然普通科に入ったなら最高学位を目指さないといけないのに，そのチャレンジを怠りました。ですから，大学へ行っておりません。ただ，今の若い人たちと違って，ちょうど日本は昭和30年代の高度経済成長期でしたから，廿高の普通科にも一流企業からたくさん求人が来ました。昭和37年です。そういう時代でしたから，私も某一流証券会社へめでたく就職しましたが，２年しかもちませんでした。

それを今，改めて思いますと，当時は学歴社会ということもありましたが，まだ証券会社は学歴いらんぞ。実力主義ぞというようなことで，初任給も，役場の職員さんが当時9,000円ぐらいでしたが，その当時１万3,000円ぐらいだったので，それにつられて就職したんです。ですから，一流の証券マンになろうと思って就職したわけではないので，当然２年で挫折いたしました。

のみの心臓なものですから，すぐのどがかわくんです。

それで，サラリーマンをやってもだめだなということで，何か自分で商売をしたいというふうに思いました。たまたま，うちの姉が商店街でもみじ饅頭の店をやっていて，何か商売というと，そこが頭に浮かんで，それで宮島に帰って，今日に至るということです。

ですから，最初はもみじ饅頭もやっていました。その店で物産店を一軒出すことになり，そこのいわゆる支店長ということで私がやることになり，場所的にはもみじ饅頭よりは物産店になろうということで，それを引き受けることになって，28歳のときだったと思います。物産店を引き受けるに当たっては，例えば湯﨑知事がそこを任されて100の実績を上げられるなら，おれが行く以上は絶対120にしてやろうと，どちらかというと，こういうタイプなので，そのためにはどうしたらいいかと考えたときに，もみじ饅頭は当時売れていました。例のＢ＆Ｂで爆発的に売れていましたが，その売れる大きな要因は，店頭製造の店頭販売です。どこのお店も全部店先で焼くところを見せて，できたてがありますよと。それが売れた大きな要因だと思ったのです。

物産屋というのは，当時，宮島は問屋さんの力がたくさんあって，今日店を開くと言ったら，問屋さんが全部持ってきてくれます。だから，何もしなくても店一軒できます。そ

れだけではおもしろくない。もみじ饅頭のことが頭にありましたので，何か店頭で客にアピールできるものはないかと。それで，彫刻を始めたんです。なぜ彫刻かというと，こういうお盆をつくるのにはかなりの設備が要ります。彫刻はテーブル一つと，彫刻刀を買えばできるわけです。ですから，よく聞かれますが，親が彫刻士だったのか，親が工芸士だったのかと。全くそうではないです。店の経営のために探して，実に不純な動機でこの世界へ入りました。

いざ入ってみて，それまで宮島にいても宮島彫りというのを私はよく知らなかったので，土産物屋に並んでいるのだけは見ていましたが，別に大した思いもなかった。

それで，彫刻を習うにはどうすればいいかということで，当時の中学校の木工の先生が彫刻をおやりになるので，そこで手ほどきを受けて，少しやると，私も無我夢中でやっていたので，その先生がこういう彫刻はわしにはよく分からんとおっしゃって，じゃあ，この宮島彫りという世界でどなたが一人者かと言ったら，この間，広報にも書かせていただきましたが，大谷一翠先生が第一人者だということで，彼の作品に出会ったこともなかったのですが，ある日，某所で彼の作品を見て，そこにはそれまで見たこともないようなすばらしい宮島の風景が掘ってありました。こういうのができるんなら，もう少し突っ込んでやってみようかと。

ある日，師匠のところを訪ねました。訪ねるのは勇気が要りました。宮島では，あいつは変わりもんじゃけと言うわけです。行って怒られてもいけんがの，どうしようかと思いながら，その作品に出会ってから，どうしても師匠のところに行ってみたいと。狭いところですが，それまで全く面識がなかった。ある日，訪ねて行った。なら，変わり者どころか，実に人間的にもすばらしい人でした。そこで手ほどきを受けながら今日に至っているわけです。

宮島に長く住んでいて，いろいろな思いがありますけれども，今日は伝統工芸に的を絞ってやりたいと思います。今日は市長も来ておられますが，平成 18 年に廿日市に合併しました。17 年でしたか。今，廿日市市と合併して本当によかったと思います。当時は，広島市と廿日市市と住民投票までして，結果，廿日市と合併させていただきましたが，それまでの宮島町は財政不足で，どうにもならなかった。話が飛ぶかと思いますが，全国の伝統工芸，どこも苦しいです。ですから，昭和 49 年に国が伝統的工芸品産業の振興に関する法律をつくって，日本の手仕事を何とか継承しようということで，宮島細工も国の指定を受けました。しかし，なかなか後継者育成にはつながらない。また，私もそうですが，ほとんどの人たちが個人でやっています。個人では後継者を育てる力がないんです。ですから，どうしても行政の力をお借りして育てていかないと，ということです。宮島町時代も，財政が豊かなときには，今，私は宮島細工協同組合という組合の理事長をやっておりますけれども，多少の援助があって，何とかやっていましたが，そこへ廿日市と合併して，まず第 1 番に，伝統産業会館を改修していただいて，組合の方で事業をやってくれんかという

話がありました。広川，おまえ大変ぞということも言われましたが，直感で，ここを拠点に是非この協同組合を立て直して後継者を育成して次世代につなげようということで，今も事業委託を受けながら何とかそこの運営をやっております。その伝統産業会館というのは桟橋を下りてちょっと左側にありますので，是非一回見に行ってください。そこで今は体験事業を，２階はもみじ饅頭，３階は杓子の体験事業，今度は彫刻の体験事業も立ち上げます。そこが宮島町時代は無人で，年間 1000 人行くかどうかでしたが，今は年間４万人の利用者があります。興味を持ってくださる皆さんもたくさんいらっしゃいますので，ここの運営をちゃんとして，後継者育成につなげたいというのが一つ。

それから，宮島の伝統工芸に是非お力添えをいただきたいという私の論理には，宮島というのはいろいろな宝物でできています。私は 40 年間店頭でこの仕事をやってきました。末端でお客様の反応を直に感じています。ここ数年というのは，外国のお客様がとても多いです。特にヨーロッパ系のお客様は，店頭でやっていますと必ず“Beautiful!”とおっしゃってくださいます。一般の通り客のお客様では，３～４年前までは外人の方が買ってくださる確率の方がずっと高かったです。ただ，この間の震災，それから円高でちょっと外国のお客様が減っていますけれども，また落ち着くと，外国のお客様も増えると思います。宮島は，日本の世界文化遺産の中でも世界に通用する上位の部類に入ると思います。本当にすばらしいところです。こんなところはそんなにないと思います。そんな中でこの伝統工芸を絶やすのは宮島のためにもよくないと思いますし，私個人は別に後継者がいなくても困らないのですが，やっぱりこの仕事をずっとやってくると，200 年近い伝統があるわけですから，その時代，その時代の先人たちが生活をかけて一生懸命やってきてくれているのが分かるんです。決して趣味とかではなくて，生活をかけて一生懸命やってくださっている。その積み重ねがすごいです。私も裏通りの貧乏人の子だから，よく生きさせていただいたということで，何とか次の世代へ継承したい。しかも，宮島の宝物の一つだという思いで，今，一生懸命やっています。

雇用事業で，今，25 歳の若者を抱えてやっています。ですが，３～４年ではプロとしては難しいです。例えばこういうものを彫ることは仮にできるとしても，お客様が裏に文字を彫ってくれとか，それから，値段によっていろいろな彫り方をやっていかなければいけない。そういうものをみな身に付けて，独り立ちして，御飯を食べていくのはなかなか大変で，４年，５年では非常に難しい面はあるのですが，今，１人若者を，抱えているのは倉敷から来ていますが，今のところはとにかく宮島に根を据えてやってみると。最初から飯は食えないぞと言っていますが，やると言ってくれていますので，何とか１人だけでも宮島に定住させて，この宮島彫りを継承してくれればと思っております。ですが，本人の力では，誠に申し訳ないですが，なかなか，是非今後も引き続いて行政の御支援をいただければと思いますので，湯﨑知事，ひとつよろしくお願いいたします。

まとまりのない話ですみませんでした。ありがとうございました。

（知　事）
広川さん，ありがとうございました。私も今はじめてお伺いしましたが，もともとは物産店から，物産店ということは土産物屋さんということですよね。土産物屋さんを始めるというところから，そこで何か商品が必要だということで宮島彫りの世界に入っていらっしゃった。

（広　川）
そうです。全くそうです。

（知　事）
私はずっとお家の家系で宮島彫りなりお店をされていらっしゃったのだと思っていたのですけれども，そういう中で，ある意味では始められたのは偶然ですね。

（広　川）
はい。

（知　事）
しかも，お店に置くためにと始められて，普通は買ってくると思うのですけれども，御自分でされて，今は伝統工芸士として本当にすばらしい，皆さんごらんいただいていると思いますけれども，彫るようになるまでこれを突き詰めていかれたんですね。今，お土産物屋はどうなったんですか。

（広　川）
物産屋は，今，宮島に来ていただいたら分かると思いますが，400 万人近いお客さんに来ていただくのですけれども，物産屋はどんどん減っています。

（知　事）
広川さんのされていた物産店はやめられて，これに専念されたのですか。

（広　川）
いえいえ，店はそのままやっています。

（知　事）
物産店はそのままされているのですね。

（広　川）

そうです。というのは，職人さんというのは裏通りの方に住まれて，問屋さんとか小売屋さんの注文が来てはじめてやっていたわけです。そうすると，大変なんです。私はたまたまこういうことで自分の店を持っていますので,非常に販売がしやすいということです。

（知　事）

では，今はほとんど宮島彫りを中心にお店をされているのですか。

（広　川）

いやいや。今のお店は 20 坪近くありますけれども，とても宮島でできるものでは埋まらないです。だから，物産が減っているというのはいろいろな要素がありますが，まず，問屋の力が全くなくなったんです。宮島の問屋というのは，町屋通りに宮忠さんという大きな木工問屋があって，この店が隆盛時は東京にも大阪にも支店を持っていて，木工品を全国に流していました。全国に流していますから，各地でできる土産物で，これは宮島で売れるというのをまた宮島に持って帰ってきてくれました。ですから，店を一軒やるのにいろいろなものがそろえられたし，また，宮島で，いろいろな木工品，ものをつくる力が今の 10 倍ぐらいはあったと思います。その力が全くなくなっていった。このままでいくと，宮島でしゃもじもできなくなりますよ。

皆さんよく御存じの，いつも年末になると宮島張り子というのが出ますね。それから宮島土鈴も，大崎くんもよく書くけれども，よくメディアに載りますけれども，あそこも後継者はいません。そういうところばかりなので，今に宮島でできるものがなくなると思っております。

（知　事）

そういう中で，いろいろ御苦労もされながら，でもこの伝統工芸を絶やしてはいけないということで，次の世代に引き継いでいくということでやっていらっしゃいますが，なかなか突き詰めていくのは大変なことだと思います。これまで長い時間をかけて宮島彫りの文化を守って次に伝えていただくということを広川さんは継続されているということで，若者がまだ完全に育っていないようですから，引き続き御健康に気をつけながら，ちゃんと次は育つまで頑張っていただかないといけないということで，広川さんにもう一度大きな拍手をお願いします。ありがとうございました。

（広　川）

どうもありがとうございました。

事例発表④

（知　事）

それでは，最後の発表になります。宮島工業高校３年生野本耕司さんと矢野哲圭さんのお二人にお願いしたいと思います。

野本さんと矢野さんの御紹介を改めてさせていただきます。昨年開催された全国高等学校選抜ボート大会，全国高等学校総合体育大会，いわゆるインターハイですね。それから，岐阜清流国体のボート競技「ダブルスカル」種目で優勝し，日本一，三冠を達成されたということです。この種目で三冠の達成は全国で２組目で，広島県でははじめての快挙です。このお二人は，この経験を生かして，それぞれ新しい夢に向けて挑戦をしていきたいということです。

今日の発表のテーマは，「ボート競技　ダブルスカル　三冠への道のり」です。それでは，野本さん，矢野さん，よろしくお願いします。

（事例発表者（野本）

皆さん，こんにちは。私は宮島工業高校ボート部キャプテンの野本耕司と。

（事例発表者（矢野）

矢野哲圭です。

（野　本）

私たちは，今年度ボート競技男子ダブルスカルという種目で全国高等学校選抜ボート大会，全国高等学校総合体育大会，第 67 回国民体育大会と，三度の大会で優勝することができました。今日は私たちの挑戦として，この優勝の話をしたいと思います。

ところで，皆さんはボート競技を見たことがありますか。テレビなどでもあまり放映されない競技なので，知らない方も多いと思いますので，私たちが活動したこの１年の簡単な紹介と，ボート競技の映像を見てください。どうぞ。

【上　　映】

（矢　野）

私たちがこの１年間頑張ったことは，あきらめないことです。一つは，練習環境で言い訳をしないということです。私たちの練習は，このすぐ近くにあるフジグランナタリー沖の海です。ボートは穏やかなダム湖や川のような水面でするスポーツですが，私たちの練習水域はフェリーや風による波やうねりのある海です。こぎにくく練習するには厳しい環境ですが，海で練習するチームでも日本一になれることを証明したと思います。廿日市の

海が私たちを知らず知らずのうちに強くしてくれました。

もう一つは，この小さな体で体力が劣っていても，あきらめずに，こぐための技術を身に付ける努力をすれば，身長 180 ㎝を超えるような選手がたくさんいる中でも勝てることを全国に証明することができたと思います。

あきらめない。努力をする。このことを今後の人生につなげてやっていきたいと思います。

最後に，感謝です。この結果は，私たちだけで取ったものではありません。支えていただいたすべての人に感謝することが一番大事だということも同時に教えてもらったと思います。

今後は２人とも就職しますが，これまでに学んだことを生かして，国体の成人の部への出場を目指して頑張りたいと思います。

簡単ですが，こういう場を与えていただいたことに感謝して，発表を終わります。ありがとうございました。

（知　事）

野本くん，矢野くん，ありがとうございました。今，お二人の話の中に二つ大事なこと，環境に不満を言わない。環境のせいにしない。これは言い訳をしないということですね。仕事の中で，我々はつい何かあると，いやいや，それは相手が悪かったとか，状況が悪いとか，円高だからとか，いろいろありますが，そういうところに負けない，この中でやるんだ。

そして，自分たちは体格という意味ではハンディーを負っているのですか。

（矢　野）

そうです。ほかのチームに比べると，僕たちはちょっと細いというイメージで，その中でも勝ったのはすごいと評価をいただきました。

（知　事）

水泳の背泳ぎ入江陵介選手もそうだと思いますが，体格を技術でカバーする。つまり，総合力なので，ほかの人に負ける点があったとしても，ほかの人に勝てる点があって，それを伸ばすことができる。そうすると，勝つことができる。そのためには，あきらめないということですね。本当に我々大人が聞いても大事だなと。自分たちも実践できているかなと思いますが，そういう強い気持ちで苦しい合宿も乗り越えて，それがあるからこそ高校三冠を達成されたということで，どんな競技でも，高校日本一になる。あるいは，高校，成人を含めて，日本一になる。これは大変なことだと思いますけれども，それを実現された野本さんと矢野さん，本当にすばらしい成果を残してくれました。またきっとこのお二

人は社会でも頑張ってくれるに違いないと期待できますよね。そんな２人にもう一度大きな拍手をお願いしたいと思います。ありがとうございました。

（司　会）

ありがとうございました。以上で予定の事例発表はすべて終了となります。すばらしい発表を本当にありがとうございました。

閉　　会

（司　会）

それでは，ここで湯﨑知事に本日のまとめをお願いいたします。

（知　事）

ありがとうございました。時間を過ぎてしまったので短くまとめたいと思いますけれども，今日お話しいただきました皆さん，本当にすばらしい取組をしていただいていると思います。普通に聞くと，もちろん野本くんと矢野くんは優勝されて日本一になっているので，それはすごいとすぐ分かると思うのですけれども，ほかのお話を聞いていると，下手をするとさっと流してしまう，聞き逃してしまう，あるいは見過ごしてしまうこともあると思います。ただ，こうやってじっくりお話を聞くと，ちょっとしたこと，自分の仕事であるとか，あるいは職場であるとか，地域の中で自分が果たしている役割，そのちょっとした自分の周りのことをちょっとだけでもよくしていこう。それを人のせいにしたり，口で言うだけではなくて，こうだったらいいなということを自分が実際に行動される。それによって,実は大きな違いを生んでいらっしゃるのではないか。それぞれの皆さんがいらっしゃらなかったら，例えば宮島の高齢者の方が孤立してしまったり，吉和の子どもたちも新しいクリスマスを楽しむ夢がなかったり，あるいは伝統工芸が継承されなかったり，そういうことが起きるわけです。だけども，ちょっとずつでもこれをやろうとされることによって，それが大きく世の中を変えていく。その積み重ねが大きく世の中を変えていくのではないかと改めて感じました。

広島県も「未来チャレンジビジョン」という 10 年後の広島県はこうなりたいという姿を描いていろいろな施策に取り組んでいますが,その中の重要なコンセプトは,「県民の皆さんが主役です」ということです。１人ひとり，どんな人でも持っている役割の中で，今日よりもいい明日，明日よりもいいあさって，それを少しずつ積み重ねていけば，本当に明るい広島県が開けていくのではないかと思います。

今日発表いただいた皆さんの実例をお聞きいただいて，また皆さんも明日からの糧にし

ていただいて，ちょっとでもいい明日をつくっていただければ，そして，我々行政も一緒にそれをお手伝いして，いい広島県をつくることができたらと思っております。

もう一度，今日発表いただきました５名の皆さんに大きな拍手をお願いいたします。本当にありがとうございました。

（司　会）

ありがとうございました。以上をもちまして「湯﨑英彦の地域の宝チャレンジ・トーク」を閉会いたします。御来場いただきました皆様，本当にありがとうございました。

なお，御来場時にお渡ししたアンケートと地域の宝ネットワークの申込書を出口で回収いたしますので，よろしくお願いいたします。

また，地域の宝ネットワークにおきましては，フェイスブックによる情報の交流も行っておりますので，是非皆様も御参加ください。

本日は御参加をいただき誠にありがとうございました。どうかお気をつけてお帰りください。